

事例報告③ 名古屋学院大学

「自己点検・評価」の実質化を支えた ingredients

名古屋学院大学の場合

赤楚 治之

常任理事・外国語学部教授



はじめに

第4期認証評価

「学習成果」を基軸にした内部質保証システムが有効に機能しているか？

➔ 内部質保証の実効性 = その前提：「自己点検・評価」の「実質化」

➔ 第4期認証評価を目指して、名古屋学院大学は「自己点検・評価の実質化」に取り組みました。

➔ 本報告では、その経験から得られた知見をご紹介します。

☆ どうぞ、よろしくお願いいたします。

1964年創立 キリスト教主義大学 収容定員5,600名（現在6,309名）



F.C. クライン博士（米国宣教師）

名古屋英和学校（1887年創立）

経済学部

経済学科

商学部

商学科・経営情報学科

現代社会学部

現代社会学科

法学部

法学科

経営学部

データ経営学科

社会科学系

建学の精神

敬神愛人

外国語学部

英米語学科

国際文化学部

国際文化学科

- ・グローバル文化専攻
- ・国際協力・共生専攻
- ・国際日本学専攻

人文科学系

自然科学系

スポーツ健康学部

スポーツ健康学科

リハビリテーション学部

理学療法学科



認証評価への取組

認証評価制度への準備：「全学点検評価委員会」による『自己点検・評価報告書』

第1期（2004年）→ 第2期（2011年）→ 第3期（2018年）

2019年3月 第3期認証評価の結果：1点の是正勧告 + 5点の改善課題

2022年7月 「改善報告書」の提出

2023年3月 「改善報告書検討結果」

2025年度 第4期 受審

特に重要な課題

第3期認証評価結果における2つの重要課題

1) 内部質保証

2) 学習成果の可視化

特に重要な課題

第3期認証評価結果における2つの重要課題

1) 内部質保証

2) 学習成果の可視化 → 1)との関連で言及

特に重要な課題

第3期認証評価結果における2つの重要課題

1) 内部質保証

全学点検評価委員会 と 教学改革推進会議

→ 両者の棲み分け、責任が不明確という指摘

第4期に向けての対応

第3期認証評価結果における二つの重要課題

1) 内部質保証

~~全学点検評価委員会~~ 教学改革推進会議

- 両者の棲み分け、責任が不明確という指摘
- 教学改革推進会議の一本化

第4期に向けての対応

第3期認証評価結果における二つの重要課題

1) 内部質保証

~~全学点検評価委員会~~ 教学改革推進会議

- 両者の棲み分け、責任が不明確という指摘
- 教学改革推進会議の一本化
- 問題は、外枠の整備でない。

真の問題 → 「教育の質向上」に向かう内部質保証が
「本当に」動くものになっているか。

→ 自己点検・評価の「実質化」

実質化の問題

これまでも大学基準協会による認証評価において
問題点や課題点の指摘 → その対応を行ってきた。

しかし、それらの対応を通して、「自己点検・評価」が
本当に「自分たちのもの」になったのか？

最も重要かつ最も難しい点＝自己点検・評価「実質化」

2020年4月 学長就任時の最大の問題意識
この問題に向き合わずして、自己点検・評価はない。

実質化の必要性

2020年4月学長就任時の状況 → 新型コロナウイルス感染症

2021年度入試 私立大学 志願者を減らす

その激減の理由を新型コロナ感染症による受験回数の低下だけにするのは危険。

2024年問題（18歳人口最低（106万人））

2030年からの少子化加速時代 → 危機感

志願者が集まる大学を目指すには

1. 注目されるプロジェクト（大きな予算必要、効果は短期的）
2. 信頼ある教育の提供（育む力）← 地道であるが本道

→ 2 に本気で取り組む必要あり → 「自己点検・評価」の活用

実質化に向かうために

「自己点検・評価」の活用 = 実質化

1) 内部質保証

・「自己点検・評価」への姿勢を変えること

☑ やらされている感

☑ 徒労感（やっても変わらない）

} → 負の感覚

これを払拭しない限り「実質化」は不可能！

大学基準協会の調査

大学基準協会大学評価研究所

「教学マネジメントのあり方に関する調査」(2022年)

(教学マネジメントに関する調査研究部会 (部会長 大森不二雄先生))

☆明らかにになった問題

- (1)「教学マネジメント」が教員に届いていない。
- (2)形式的遵守や受動的業務となっている。
- (3)組織的な教育改善の事例は拡がりを見せていない。

大学基準協会の調査

大森不二雄先生（調査研究部会長）（2024）

「「教学マネジメント2.0」の必要性」

（『大学における教学マネジメント 2.0』（2024）JUAA選書）

- 教育実践にインパクトをもたらし実質化するためには
できるだけ多くの教員の参加（理解と協力）が不可欠。
→ 教育の現場に近い学部学科が主体的に取り組むこと
- 大学執行部がそのような組織風土を醸成する必要あり。

実質化に向かうために

実質化 → 何が必要なのか？

実質化のためのINGREDIENTS

実質化 → 何が必要なのか？

1) 学長の決意

2) 学部長の理解

3) 現場重視の姿勢

4) 教職員への伝達

実質化のためのINGREDIENTS

(1) 学長の決意

- ☆ 第3期での指摘を機に、**うわべだけの「自己点検・評価」**はやめ、
将来の少子化加速時代においても 持続可能な、
(世間から評価してもらえる)「真の教育力」をもつ大学
にむかうための **実質的な「自己点検・評価」** に変えていこう！

「文科省が言うから、認証評価があるから」から
「学生のため、持続可能な大学のため」へ

➔ 副学長、学長室長(教学担当事務局次長)と方向性の確認

実質化のためのINGREDIENTS

(2) 学部長の理解

☆各学部の教学マネジメントの中心となる学部長がキーパーソン

「自己点検・評価」の重要性 → 問題点・課題点をしっかり把握・記述

当初は温度差はあったものの、最終的には問題意識を共有。

☆自ら進んで改革に取り組む高い志の学部長が存在していた / 現れてきた。

☆学部長会議での各学部での動きの報告 → 学部長間における情報共有

☆学部長への支援（教授会での説明、学長裁量予算の分配、モラルサポート etc.）

実質化のためのINGREDIENTS

(3) 現場重視の姿勢

民主的な手続きで上がってくる現場からの建設的な声 → 大切にする

学習成果の可視化 ← 現場重視

大学教員：上から押し付けられることに抵抗

その意義と重要性＋モデル提示→各学部で議論

学習成果の可視化への流れ

学習成果の可視化

2020年8月 教学改革推進会議で 改善方向の議論

2021年4月 教学改革推進会議で 2方式案 決定

A方式 or B方式、各学部で、2021年度中に、検討・決定してもらう。

A方式) 卒論を用いた学習成果評価表

→ 学部として卒論で達成度チェック: 「梗概」 + 学習成果評価表 (学生→教員→学生)

B方式) ポートフォリオなど

→ 学習の進捗状況をチェックしながらアドバイスする: 「ポートフォリオ」 etc.

当初、多くの学部が A方式 を選択するであろう と予測。

各学部で議論 → A方式では学士力の到達度を学生に示すことはできない。

→ B方式を選択。

学習成果の可視化：法学部

学習成果の可視化

法学部：2022年度新入生からポートフォリオ開始

- ・学生自身が現状を把握し、目指す将来像とDPの掲げる資質獲得のため、次にすべき目標を客観的に計画できる機会をポートフォリオで提供。

実施形態 4年間一貫のゼミ(必修)を活用することで実効性を担保

▶提出率：すべての学期で90%超え。

効果 課外活動(部活、サークル、アルバイト、ボランティア等)も記録するため、キャリア・ポートフォリオとしても有効

▶学生一人一人の目指す将来像等に応じた支援が可能に。

点検 担当者全員から「ポートフォリオ作成報告書」を徴取し、学部FD委員会や学部FD研修会にて問題点や改善点、指導方針等を点検

▶学部FD委員会でFAQを作成し、全教員がポートフォリオを有効に活用でき、指導に生かせる体制を整備。

学習成果の可視化：経営学部

学習成果の可視化

経営学部：ポートフォリオ『学びの軌跡 NOTE』（2024～）

実施形態

学位取得に向けた『学びの軌跡NOTE』を開発
「専門演習」担当のゼミ教員とのやり取り
(100%の提出率を目指す)

ループリックを用いてDPの到達度を学生自らが評価
現状・課題を認識し、成長に向けた目標を設定

卒業までの間、『学びの軌跡 NOTE』を用いてマネジメント
サイクルを回し学習の成果・質を高めるために活用

点検

データは学期毎に学部教員が分析し、学部FD委員会で報告

実質化のためのINGREDIENTS

実質化 → 何が必要なのか？

1) 学長の決意

2) 学部長の理解

3) 現場重視の姿勢

4) 教職員への伝達

「改革の意義」を教員に届ける

学長 から 教授会 に向けてのメッセージ文書

2021年9月 質保証の議論を足掛かりに持続可能な大学へ

2022年4月 新年度の始まりにあたって 2022年度に取り組むべき項目

2023年4月 2023年度の開始にあたって— 2023年度は「実質的点検評価スタート年」

2024年1月 新年度(2024年度)を迎えるにあたって=ポスト学力選抜時代に向けて

2024年4月 2024年度の開始にあたって — 学部教育での共働とNGUクロスによる
発信がカギ—

2025年1月 少子化加速時代に備えるための本学の挑戦:ピンチをチャンスに

2025年4月 2025年度の開始にあたって—少子化加速時代の前に私たちの手にある
3つのツールに磨きをかけよう!

2025年10月 ここに本学の強みがある!

「改革の意義」を教職員に届ける

FD・SD研修会での学内の取組み状況の共有

- 2021年9月 選ばれる大学に向けて: 今、本学が取り組むべきこと
- 2022年3月 法学部におけるポートフォリオによる教育の質保証
- 2022年9月 名古屋学院大学における教学マネジメントとは
- 2023年9月 現状打開策としての「BT25の形成」
今年度春学期 国際文化学部マネジメントの実践
学部特性を生かした教学マネジメントと学部の魅力発信
- 2024年3月 経営学部が目指す教育とサポート体制
もし入学した学生がみんな立派な理学療法士になったら
- 2024年9月 本学の「強み」を考える
- 2025年9月 法学部ポートフォリオの活用・改善・定着に向けた取組
その後の学部現状と現在のマネジメント指針
スポーツ健康学部の現状とこれから

学長

法学部長

学長室長

経済学部長

国文学部長

副学長

経営学部長

リハ学部長

学長

法学部長

国文学部長

スポ健学部長

実質化のためのINGREDIENTS

実質化 → これらの4点が必要な INGREDIENTS であった。

1) 学長の決意

2) 学部長の理解

学部長の理解と協力 + 学部長への支援 + 学部長間の情報共有

3) 現場重視の姿勢

建設的な現場からの声を活かすこと

民主的な手続きによる、現場重視の システム の確立を促すこと

4) 教職員への伝達

「自己点検・評価」実質化の意義と価値を伝えること（繰り返しがカギ）

実質化を前進させた2つの工夫

実質化のための INGREDIENTS

1. 学長の決意 2. 学部長の理解 3. 現場重視の姿勢 4. 教職員への伝達

実質化を前進させた2つの工夫

- ① 教学改革推進会議のエンジンとしての「点検チーム」
- ② 「実質化」の宣言

実質化を前進させた2つの工夫

実質化のための INGREDIENTS

1. 学長の決意 2. 学部長の理解 3. 現場重視の姿勢 4. 教職員への伝達

実質化を前進させた2つの工夫

① 教学改革推進会議のエンジンとしての「点検チーム」

教学改革推進会議 大きな会議 = 建設的相互批判が出にくい空気

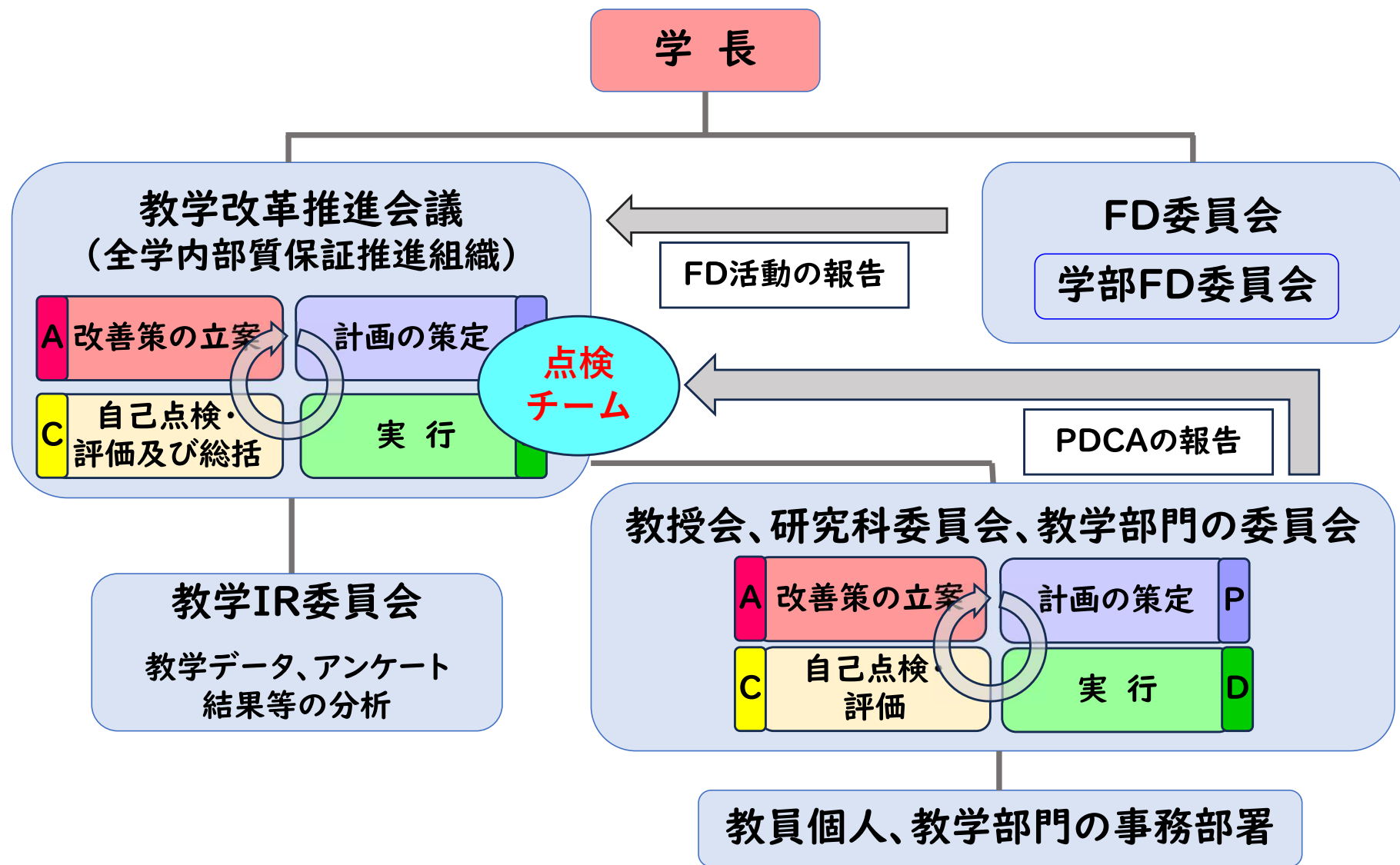
→ チェック機能が確実に機能するための工夫が必要

→ 自己点検・評価シートを事前にチェックするための「点検チーム」を設置

構成メンバー：学長、副学長、教務部長、学長室長（教学担当事務局次長）

→ お化粧ではない記述 = 問題点・課題点の認識・把握

名古屋学院大学内部質保証体制図（簡略版）



実質化を前進させた2つの工夫

実質化のための INGREDIENTS

1. 学長の決意 2. 学部長の理解 3. 現場重視の姿勢 4. 教職員への伝達

実質化を前進させた2つの工夫

② 「実質化」の宣言 → 「2023年度は実質的自己点検評価のスタート年」

スローガンを掲げ、取り組む姿勢を明確化
→ 学長・点検チームの本気度が見える化

特に、2022年度末の「自己点検・評価シート」の提出時に、
次年度(=2023年度)のPlanについては、何を具体的に取組むか
について記述することを訴えた。

「実質的点検評価スタート年」

2023年度「実質的点検評価スタート年」

2024年 2月 点検チームによる「2023年度の点検・評価シート」チェック

→ いくつかの学部原案に対し、書き直しを依頼
真摯に取り組むいくつかの学部の存在

2024年度 → 実質化2年目

ほとんどの学部で「点検・評価」への意識が向上
書き直し → 2学部

2025年度 → 実質化3年目

書き直し → 1学部

熱田区からの意見書：2024年度の報告書

熱田区役所からの意見書（抜粋）

「非常に適切な点検評価がされている。」

「報告書からは、学内において、実質的な点検・評価の重要性を繰り返し説明されてきた結果、組織全体の理解が進み、丁寧な点検・評価が行われていることが伺える。」

「結果として、2024年度最重要項目として取り組んだ「内部質保証のPDCAサイクルを適切に回す」につながるなど、大変評価できる。」

実質化を前進させた2つの工夫

実質化を前進させた2つの工夫

① 教学改革推進会議のエンジンとしての「点検チーム」

- ➔ 自己点検・評価に大学として真剣に取り組んでいることを示す。
- ➔ 信頼関係の構築

② 「実質化」の宣言 ➔ 「2023年度は実質的自己点検評価のスタート年」

「自己点検・評価」実質化の効果

学部で教育改善への自主的な取り組みが進展

- (1) 現代社会学部 → 「**教学マネジメント推進委員会**」設立(2024年度)
教学ライン(教務委員会)の運営に対して、点検+提案
- (2) 国際文化学部 → 「**将来構想チーム**」設立(2023年度)
総合的な学部理念・目的をもとに中長期計画 → 戦略的な人事補強
- (3) リハビリテーション学部 → 「**学生・教員意見交換会**」
教育改善・環境整備・学生生活充実を目的に年2回実施
ランチョン形式、和やかな雰囲気意見交換
学生の意見を教員が真摯に聞き、改善策を話し合う
後日、全体の結果をまとめ対応策とともに学生に報告

本学の現状

「自己点検・評価」の実質化」の現在地

- ☆ 全学部において「自己点検・評価」に対し、真摯に向き合う姿勢が見れてとれる。
- ☆ 全学部において、「自己点検・評価」による PDCA サイクルが確実に動いてきた。
- ☆ 学部における主体的な取組が醸成されてきた。

まとめ

第4期認証評価に向けて名古屋学院大学が取り組んだ「自己点検・評価の実質化」

実質化のためのingredients

- 1) 学長の決意
- 2) 学部長の理解
- 3) 現場重視の姿勢
- 4) 教職員への伝達

実質化を前進させた2つの工夫

- ① 教学改革推進会議のエンジンとしての「点検チーム」
- ② 「実質化」の宣言

この取り組みがもたらしたもの：教育改善への意識の高まり → 今後は「文化」へ

参考文献

・大森不二雄・編著（2024）

『大学における教学マネジメント 2.0』JUAA選書（大学基準協会監修）18

・大学基準協会大学評価研究所

「教学マネジメントのあり方に関する調査」（2022年）

教学マネジメントに関する調査研究部会



ご清聴ありがとうございました。

事例報告③

**「自己点検・評価」の実質化を支えた ingredients
名古屋学院大学の場合**

赤楚 治之

常任理事・外国語学部教授